

我が本性は詩人なり

辻 憲男 (文学部教授)

受験シーズンになると、天神さん・菅原道真（すがはらのみちざね）は偉かったのだなあとと思う。学者で政治家、そして何よりも詩人だった。59年の生涯でつくった漢詩は五百以上というから、学問の神様は少年時代から晩年まで、勉強や仕事の合い間に詩を書くことで、自分自身と向き合ったようだ。

道真は26歳で最上級の国家試験に合格した。ただしその時の答えは“中の上”つまり75点ぐらいで、合格すれすれだったという。それから発奮して刻苦勉励、33歳の若さで文章博士（もんじょうはかせ）になった。管家代々の名誉を継いだわけだが、父の是善（これよし）は、道真に頼りになる友人や親族がいないことを心配した。結婚して子だくさんだった。7歳になる次男と、その弟をつづいて病気でうしなったこともある。京から任地へ戻る道中、梅や柳を見てひとり感傷にひたり、ああ我が本性は詩人なりと自覚した。その詩を明石の駅舎の壁に書いた。何かにつけて詩をつくっては孤独をなぐさめた。

ところが901年2月、突如冤罪（えんざい）によって九州太宰府に流された。幼い男児と女兒を連れていくことが許された。そまつな舟に乗って淀川を下り、須磨浦を過ぎた。伝説では、須磨の村人は漁網の綱（つな）を敷いて御座所を設け、涙して見送ったという。「駅長驚くことなかれ、時の変改」、どうあれわたしは一詩人、人のさだめとはこういうものですよ、明石駅の駅長さん。



須磨の天神さま、綱敷天満宮。同名の神社は東灘区や京都、大阪、愛媛県、福岡県などにある。